

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.13(2), August, 2009

記事

巻頭言

体育哲学考

書籍紹介

私の研究

「愛」の字でふり返る箱根合宿

運営委員会からのお知らせ

(日本体育学会等)

次号予告

巻頭言

スポーツの実践力と生きる力～アランのことはから～

瀧澤康二(日本体育大学)

巻頭言の執筆依頼を受け、ふと、以前「スポーツの実践力」について述べたことを思い出した。そこでは「スポーツの実践力」と「生きる力」の間に何か深い関係があり、その解明が望まれると課題を残した。勿論、ここでいう「生きる力」とは、よりよい人生を送るための力であってそれ以外の何ものでもない。自分自身の反省も含め、敢えていえば、現代社会に身を置く多くの人、極度に発達した機械文明に振り回され、自らの生きる力が衰弱し、他者の力を借りて「生かされて生きている」といえるだろう。その機械文明は科学技術の力によって創られた。その科学のもとには人間が使う「ことば」である。

アランは、「古代人が、ことばを使う代わりに、ダンスや身ぶりや音楽を用いたことば」によりの証拠で、そこではあきらかに表現と同意が一体となっている(「芸術の体系」長谷川宏訳、光文社、2008、p.20)といい、暗にことばの多用が人間の生き方を邪魔しているかのようにいっている。また、その文脈から読み取れることは、芸術の評価はそれを評価する人の感情に委ねる他ないが、人々の思考は同じ目的に向かっていることが確認されてはじめてそこでの考えに意味が認められるということだ。

石川旦先生が「会報 vol.10(4)」の研究提言、そして「会報 vol.13(1)」の巻頭言で立場は違うが同じようなことを述べられている。つまり、個々人の理論(ことば)が個々人のそれで終わってしまったら何の意味もないということだ。人類共通の課題(健康な人生を送ること)に向かう共通認識をもち、それをいかに合理的に実践に移せるかを知り(理論)、実践(行動)してはじめて意味(価値)が生まれるということだ。ちなみに、筆者はその過程が「スポーツの実践力」であり、その理論と実践の発揮こそ「生きる力」を育むものだとして認識している。石川先生の「理論的知識の体験的知識化」をそのように読み取った。

筆者はまた、人類共通の目的(理念=最高の価値)は、上述のように人生を健康に(豊かに、幸せに、平和に、など同義)送り、死(end=目的)を迎えることであると考えている。ただ厄介なことは、人によって価値観が異なる故、目的の捉え方や達成の手段が千差万別だということだ。だが、人がことばを使い、文化を築いてきたのはすべて目的達成の

ための手段の工夫によるものであることも事実だ。問題は、個々の手段がどこへ向かっているかである。その意味では、「現代社会は、道に迷っている人の集まりである」といってもおかしくない。私たちのスポーツの世界も例外ではない。そしてこれから先、もっとその傾向が強まるであろう。その理由は、ことば（情報）の歴史に見出すことができる。

人類はことばを問うこと（学問）によって更に新しいことば（知見、理論、命題、法則）を生み出し、今日みるような社会を築いた。こうして築かれた現代社会は、ことば（情報）が氾濫しているかのようだ。それらのことばが真に意味があるかどうかをアランは問いかけていたのかも知れない。少なくともアランは、芸術の世界ではことばよりも感情のほうが重要であるといい、また、ことば（思考）が意味（価値）をもつのはそのことば（理論）が人類共通の目的に向かって創られ、使われていることが条件であるともいっている。

体育哲学考

「中間に立つ」 田中愛(武蔵大学)

「研究者自身が『知りたい』と思うこと、そのフィールドで未だ明らかにされていないことを徹底的に調べて解明する。そのために対象から一步引き、論理に則って抽象的な概念を操作し、その対象について今まで見えなかったことを見えるようにする。」まずは、これが哲学だと言えそうである。時には「それを知って何か利益があるの？」という問いかけとせめぎ合いながら、純粋な探究心を持って考え議論するという点で、哲学は「知的に遊ぶこと」とも言える。しかし、いざ「体育哲学」を筆者の身に引き寄せて考えてみると、体育授業が主な関心事であるためか、少し違った説明になりそうだ。

「体育授業」を研究対象とする領域は他にもある。どの領域においても、「人が育つとはどういうことか」、「授業がうまくいくとはどういうことか」などの問いが背景にあり、授業方法や評価方法の開発を支えているはずである。それにもかかわらず他の領域では、これらのことが直接問われることはない。そこで「体育授業」にも教育哲学の観点が必要となる。ところが、日々の体育授業はこんなことに立ち止まっている教員を待ってはくれない。例えば次にどんな練習メニューを提示するか、一瞬迷っただけで一時間の雰囲気壊れてしまうことがある。また、「技能ばかりを重視してしまえば、もっと大事な成長の場面を見落とすかもしれない」と頭で考えていても、目の前に「できない」と困っている人がいれば「できなくてもいいよ」と言ってはもらえず、できるようになってほしいとあれこれ工夫せずにはいられない。すると、「できるようになる」とことと「人間としての成長」はどんな関係になっているのか、悩み始めることになる。悩んで、やってみて、また悩む、試行錯誤の連続である。理念と現実にはどこまでもギャップがある。現実に足を突っ込みながら理念を追うことは不可能のように思えてくる。しかし、このしんどさを引き受けることによって、新たな中間領域が拓けるかもしれない。

ある教育哲学者は、学生に向かって次のように話すそうだ。「自分自身が良い人間に変わっていけるような研究にしてほしい。」と。たしかに「教育」を扱う哲学は、一般の哲学と違って知的探究心を満たすだけでは許されない学と言えるかもしれない。教育がいつも他

者に働きかけることであり、他者に何らかの影響を及ぼしてしまう行為であるなら、それを実践し研究する人自身の「育ち」も自然に問われてしまうだろう。

運動やスポーツは、どんなところが人の成長を助けるのか、そして、体育授業の中で「この人が育った！」と思える瞬間に、教師は何を見ているのか。これらのことは、自分も成長し続けなければ見えない。人が育つことについて、理念と現実の両側から、その中間に立って言葉にする。体育哲学で、私はこのことを実現したいと思う。

書籍紹介

杉山英人(千葉大学)

“ *Herbert Spencer, Education : Intellectual, moral, and physical* ” . (1860/1861)

スペンサーといえば、かつては、コントと並んで社会学の創始者として、また、進化論（あるいは社会進化論）の提唱者として、そして、「知育・徳育・体育」という用語とともに『教育論』という教育学の古典の著者として知られていたが、今では忘れられた思想家の一人となっている。例えば、今年（2009年）は、ダーウィンの『種の起源』の刊行150年、生誕200年であり、ダーウィンとともに進化論が取りあげられる機会が多いが（『現代思想：ダーウィン - 『種の起源』の系統樹 - 』, 37-5（4月臨時増刊号）, 2009年；『Newtonムック：生誕200周年、『種の起源』150周年 ダーウィン進化論』, 2009年他。）、スペンサーに焦点が当てられることはない。

このように忘れられた存在ではあるが、スペンサーの『教育論』は、近代教育のカリキュラム構成の基本的枠組みを提示したものである。現代においても「知・徳・体のバランス(教育基本法第2条第1号)」が重視されており(文部科学省『中学校学習指導要領解説：保健体育編』平成20年, p.1.)、この枠組みは機能しているといえる。そして、体育という制度の成立根拠も基本的にここに求められる。

その一方で、三育思想といわれるこのような枠組みに対しては、人間性の構成契機である知性、徳性、身体性の実体化という視点から、近年批判がなされてもいる。もちろん、それぞれに関わる教育領域の単なる集合体そのまま統一体としての人間性の育成につながるという保障はない。また、人間は他者との関係において成長し、その過程で身体は知性や徳性と関わるとともに、文化的・社会的・歴史的の影響を受ける。そのため、身体を他から独立して育成するということが自体矛盾することになる。この点については、「教育における身体性」という視点からの「身体教育」の議論、即ち、身体を基点とした教育の再構築の試みがある。

このような状況の中で、スペンサーの『教育論』の存在意義は、その人間把握の三契機が、スペンサーの理論体系における重要概念である「調和(equilibrium)」という視点から統一体としての人間性の育成を前提としており、従って、それに基づく三領域の教育は目的としての「完全な生活(complete living)」を志向しているため、人間性全体とその構成要素の関係性から体育及びその制度を考察する契機となることに求められる。

なお、スペンサーの理論体系（『総合哲学体系』[全10巻, 約6000頁：1862-96]）の入門

書として位置づく『教育論』は、それぞれ独立に発表された4つの論文から構成されているが、それらを一冊にまとめる際の再録の許可の問題から、まずアメリカで1860年に、次にイギリスで1861年に出版された。

私の研究

井上直紀(東京学芸大学)

東京学芸大学修士課程2年の井上直紀です。今回は「私の研究」ということで、修士課程において私がどのような研究をしているか稚拙ながら紹介申し上げます。

私は今年度提出致します修士論文において、ノルベルト・エリアスという歴史社会学者の「スポーツ」の捉え方を理論研究しています。研究目的としては、体育原理・スポーツ哲学における「スポーツ」を考えるときの一つの切り口として提示できないかと考えています。さて、このノルベルト・エリアスという学者は当分科会では、あまり取り上げられていませんので経歴など簡単に紹介いたします。

エリアスは1897年ドイツの都市ブレスウラ生まれのユダヤ系ドイツ人社会学者です。リッケルト、フッサール、ヤスパースらに哲学を学び、アルフレート・ウェーバー、マンハイムのもとで社会学の研究に従事していました。社会学者として数多くの大学で教鞭をとってしました。彼の研究の背景となる事件の一つとしてナチス政権化でのユダヤ人迫害があります。彼は1933年にドイツを離れることを決意し、1935年にロンドンへと亡命しますが、1940~41年ユダヤ人を迫害するという政策の下で両親を亡くしています。この事件から「暴力」を憎む彼の意思は、彼の研究を読み解く一つのテーマとして「暴力」というキーワードなくしては、読むことができないものになっています。

また彼の文献を読み解く上でもう一つ重要なキーワードとして「文明化」という言葉があります。彼の文明化論とは社会の合理化論であり、意識や欲求の合理化過程を描いています。この文明化の原動力には、他者への配慮や階層間の差異化のメカニズムなどがあり、社会生活を営む上で他人との衝動の衝突などを避けようとしたり、自分たちより下の階層の人たちとの振る舞いの違いを作ったりする人間の生活様式と密接に関わっていきます。この「文明化」の過程の中で、人々は常に他人の目を気にするようになり、自分の感情を抑圧していくようになります。また「文明化」とは常に過程なので今日私たちが常識だと思っているマナーなども将来「野蛮」や無作法というレッテルが貼られる場合があるということもこの「文明化」という言葉には含まれています。また「文明化」が進み感情を抑圧している社会は「興奮なき社会」だとエリアスは述べています。人生を通じて強い感情を抑制し、衝動や感情や情緒の規則的な自制を一定し続けることは、人間内部に強い緊張感を生み出します。この「文明化」によって増大した抑圧の緊張は、ほとんどの社会によってなんらかの対抗策を発達させています。例えばアリストテレスによって音楽・悲劇による浄化・高揚と表現された抑制を、バランスの取れた形で弛緩させる動きは、現代では「余暇活動」として、公の場で適度に興奮をしたふるまいをすることが社会的に認められた飛び地を形成していると言えるでしょう。エリアスはそのひとつが「スポーツ」を挙げ

ています。

以上のような、「文明化」している社会に必要なものの一つとしてエリアスは「スポーツ」を挙げています。今後、更に研究を重ね、彼の言う「スポーツ」の本質にせまればと思います。

「愛」の字でふり返る箱根合宿

高田直来(新潟大学大学院)

平成 21 年度体育哲学専門分科会夏期合宿研究会が 7 月 18 日から 20 日にかけて、箱根町静雲荘にて行われました。

15 の研究発表をはじめ大学院生による研究小報告、「変革期における体育哲学」というテーマで 5 つのグループに分かれてのラウンドテーブル、そして懇親会とこの 3 日間は非常に濃密で貴重な時間を過ごさせていただきました。

さて、今年度の大河ドラマは越後の知将直江兼続が主人公となっております。地元の雄とあって新潟でも大変盛り上がっております。巷では兼続が着用した「愛」の兜が話題となっているようですが、大河ドラマ的にはこの「愛」の字は家族や友人、師弟などといった「人と人のつながり」を大切にしようという仁愛からきているようです。合宿期間中の放送は小田原が舞台となっていたようです。小田原といえば箱根とまさに目と鼻の先！そんな奇遇なつながりから、今回の雑記も「愛」の字を通して私なりに箱根をふり返ってみたいと思います。

合宿前、私は様々なことに迷い、悶々とした日々を過ごしていました。人はどうすればもっと人と結びつくか？遊びとコミュニケーションはつながるのだろうか？楽しさとはなにか？体育と遊びの関係は？……などです。石垣先生のご指導のおかげで、何とか発表の形までは持っていくことはできましたが、多くの問いは箱根に着いても私を迷わせ続けていました。

そんな中で合宿は始まりましたが、そこで待っていたのは同じように問いに迷っていた仲間でした。問いの方向性は違っていたかもしれませんが、しかし同じように迷っていたのは確かでした。そんな仲間と私は徹底的に話し合いました。部屋、ロビー、食事中、そして入浴時まで。お互いの真剣さは魅力となってお互いを魅了し、思考の深さは箱根に来る前と比べるとかなりのものになった気がします。

そして、先生方の洗練された研究発表を聞くことができました。問題への着眼点や論理的な展開など、すべてが勉強になりました。私はといえば、恥ずかしながら緊張のあまり咽喉から声が出なくなってしまったのですが、発表後多くの先生方から声をかけていただき、ご指導ご鞭撻をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

こうふり返ってみると、私は問いを解決したわけではありません。しかし、箱根合宿で先生方や大学院生と語り合うこと通じて、もっと問い続け、迷うことを楽しみながら答えを見つけ出したいという境地に立つことができました。これは「人と人のつながり」がこの合宿では大切にされてきたからなのではないかと感じます。まさにこの合宿こそ「愛」

そのもので表すことができるのではないのでしょうか。

上記にもありますが合宿中にご指導いただいた先生方、研究生、院生の皆さんに心から御礼申し上げたいと思います。特に同部屋だった静岡大学の石舘さんと高崎さん、本当にありがとうございました。また、佐藤先生からはあるお言葉をノートに書いていただきました。ここでは敢えて披露せず、私の一生の宝物として、これからの人生を歩んで行こうと思います。

運営委員会より

新保淳(静岡大学)

「日本体育学会第 60 回大会（広島大学）のプログラム」

8月26日（水）

9：00 - 10：00

【キーノートレクチャー】

教育学とスポーツ哲学

講演者：David A. Turner（グラモーガン大学・広島大学客員教授）

司会者：樋口聡（広島大学）

10：10 - 12：10

【シンポジウムA】

体育哲学における学校体育論議の検討とその視界

（1）学校体育論の逆照射 体育は子どもたちをどうしたかったのか？

趣旨説明・司会：大橋道雄（東京学芸大学）、阿部悟郎（仙台大学）

演者 平井 章（島根大学）：体力論の視界 戦後学校体育における運動観の変遷と体力論議 -

久保健（日本体育大学女子短期大学）：運動文化論の視界 スポーツの主体者形成と生活世界との往還

長見真（仙台大学）：楽しい体育論の視界 プレイとしての運動を学習する意味とその可能性

滝沢文雄（千葉大学）：身体教育論の視界 - こころの対極としてのからだ -

12：15 - 13：00

運営委員会

8月27日（木）

9：00 - 11：00

【シンポジウムB】

<広島>と身体文化：ローカリティの哲学の試み

趣旨説明・司会：樋口聡（広島大学）

演者 舛本直文（首都大学東京）：<広島>のグローバルなスポーツ文化

釜崎太（立正大学）：<広島>高等師範学校における近代「体育」観の形成

桑島秀樹(広島大学): ヒロシマと<不在の身体> 喪のアート化としての演劇的身ぶり

11:10 - 12:00

総会

【一般研究発表】

座長: 新保 淳(静岡大学)

13:00~13:20 森田 啓(千葉工業大学): 教養教育・専門教育としての大学体育の試み - 体育から大学教育を変える可能性 -

13:20~13:40 高橋 浩二(大阪産業大学): 運動実践を通じた身体観の変容可能性 - 実践者が運動から学ぶ身体の立ち現われ -

13:40~14:00 阿部 悟郎(仙台大学): 体育学における教育学的視野の一礎石 - 精神科学的教育学の体育学的可能性 -

14:00~14:15 質疑応答

座長: 高根 信吾(富士常葉大学)

14:15~14:35 別所 秀夫(京都教育大学大学院): 戦後、体育研究における「体力概念」図の批判的検討

14:35~15:05 跡見 順子(東京大学アイソトープ総合センター): 重力生物学基盤からの体育原理・身心関係・健康基盤の再構築(その一) - 重力場における生命創発・維持適応を生み出した“運動”の基盤と自己理解のカタ -

15:05~15:25 長島 和幸(早稲田大学大学院): レスリングの移入と八田一朗のレスリング観

15:25~15:40 質疑応答

8月28日(金)

【一般研究発表】

座長: 服部豊示(明治薬科大学)

09:20~09:40 高岡 英気(筑波大学大学院): 「産業としてのプロスポーツ」の存立構造 - リーグ型プロスポーツを事例として -

09:40~10:00 舛本 直文(首都大学東京): 2008年北京オリンピック大会の平和運動 - 国際聖火リレー騒動とオリンピック休戦 -

10:00~10:15 質疑応答

座長: 久保正秋(東海大学)

10:15~10:35 岡部 祐介(早稲田大学大学院): わが国における競技者のアイデンティティ形成に関する原理的考察 - 競技スポーツの構造論的視点から -

10:35~10:55 新保 淳(静岡大学): 体育学における質的研究方法の展望

10:55~11:15 田寺 泰久(日本体育大学研究員): 高野連の下す教育的判断に関する研究 - 高体連との比較をとおして -

11:15~11:30 質疑応答

「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方は現在のところ 53 名です（2009 年 2 月 5 日現在）。これらの方々へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。
- 3) [taiikutetsugaku]グループについてのお問い合わせグループ管理者（事務局）：taiikutetsugaku-owner@yahoogroups.jp

「体育哲学研究」投稿先について

「体育哲学研究」（第 39 号）が会員の皆さんの手元に届いたことと思います。これは前編集委員会委員長の服部先生のご尽力によるものです。なお、次号（40 号）に向けて新たな編集委員長が選出されるまでの期間は、事務局（新保宛）に原稿を送付していただくよう宜しくお願いいたします。

送付先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学教育学部 新保淳
e-mail : ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp

最後になりましたが、これまで当専門分科会の発展に多大なるご尽力いただいた、金原勇先生と木村真知子先生がご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太（立正大学：kamasaki@ris.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 13 巻第 2 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会
大橋道雄（会長）
編集者 阿部悟郎（広報委員長）
発行日 平成 21 年 7 月 28 日
連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡
南 2-2-18 仙台大学体育学部
0224-55-1147（直通）
アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

分科会の重要行事の一つである箱根の合宿研究会は盛会裏に終了。ご担当の F 澤先生に深謝。ヴェテラン・中堅のご壮健もさることながら、若手がのびのびと愉しんでいる姿が印象的でした。後世、畏るべし（論語）。若手の成長こそ、分科会の命脈なり。次は、いよいよ学会大会。皆様に西条の地でお会いできるのを楽しみにしております。

さて、またもや悲報。分科会はまた貴重な指導者を失い、絶句。どうかお安らかに。合掌。（A 拝）